

今月の聖書のことば 2015.3



「主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」(箴言1章7節)

慶応義塾大学の創設者、福澤諭吉はキリスト教解禁前の1871年(明治4年)10月14日から11月にかけて、毎日ひとつの教えを書いて、一太郎と捨次郎の兄弟に与えている。それが「ひゞのをしへ」である。自身はキリスト者ではなかった福沢が、自分の子供には聖書の教えをかみくだいて教えているのに驚かされる。◆ほとんどが平仮名の文章であるが、読みやすいように漢字を交えて一部を紹介する。◆世の中に父母ほどよきものはなし。父母より親切なるものはなし。父母の長く生きて丈夫なるは、子供の願うところなれども、今日は生きて、明日は死ぬるもわからず。父母の生死には、ゴッドの心にあり。ゴッドは父母をこしらえ、ゴッドは父母を生かし、また父母を死なせることもあるべし。天地万物なにもかも、ゴッドの造らざるものなし。子供の時より、ゴッドのありがたきを知り、ゴッドの心に従うべきものなり。◆天道様を恐れ、これを敬い、その心に従うべし。ただし、ここに言う天道様とは日輪(=太陽)のことにはあらず、西洋の言葉にて、ゴッドと言ひ、日本の言葉に翻訳すれば造物主というものなり。◆公にはまだキリスト教徒が「クリシタン」「耶蘇」と呼ばれて忌み嫌われていた時代に、オランダ語、英語の知識を駆使し、欧米事情に精通した福沢ならではの慧眼と、子どもには本当のことを伝えたい、という思いが垣間見えて興味ふかい。◆世は「平成」となって久しいが、ことキリスト信仰に関わっては、当時からさほど進展したように思えないのは残念極まりない。日本がほどなくキリスト教国になるのでは、と言われた明治時代に学ぶことは意外にも多い。